

## ブドウ畑の守護者たち—ロレンツォ・ロット作スアルディ家礼拝堂装飾について—

森田 優子 (東北大学)

ベルガモ郊外トレスコーレ・バルネアリオにたつスアルディ家の邸宅には付設の礼拝堂（通称スアルディ家礼拝堂）があり、画家ロレンツォ・ロット（1480 頃生～1557 年没）の手掛けたフレスコ画が三方の壁面と天井に存在する（1523～24 年制作）。祭壇に向かって左壁に聖バルバラ伝、右壁に聖ブリギッド伝、後壁にはマグダラのマリアとアレクサンドリアの聖カテリナの逸話が表されている。左壁のバルバラの逸話はキリストの後方に展開し、前面には両手を広げたキリストの指がブドウの蔓に変化して上方に伸びる様子が表され、プット／天使のいる天井のブドウ棚へと蔓がつながるように構成されている。右壁には聖ブリギッド伝が表され、扉口上部に描かれた鳥獣師は、伝承を引き継ぐかたちでロットの自画像と見なされる傾向にある。

この人物はほかのどの逸話とも無関係のようだとみられてきたが、向かい壁のキリストのほうへ鋭いまなざしを向けていることから、農村風景に添えられた副次的要素でないことは明らかである。発表では獣師を自画像とする見解はとらないが、画家の分身である可能性は否定できないと考える。フクロウを連れたこの鳥獣師は、ブドウの木キリストにある意味で対立する存在のように解釈される場合もあるが（Campbell 2019）、礼拝堂装飾における獣師の役割にかんする指摘はこれまではほとんどなく、自画像の問題以前に詳しい考察の余地が残されている（最新の研究として Dal Pozzolo 2023 を参照）。美術において伝統的にフクロウは異教の神の象徴と解釈され否定的な文脈で用いられる例が多いものの、「嘲りをうけるキリスト」を象徴的にあらわす場合もあり、さらに狩猟や鳥獣の比喻はより広がりをもった宗教的議論にも関連している。

本発表では、鳥獣にかんする記述や視覚資料としてヨハン・コンラート・エイティンガー著『鳥についての報告』（カッセル 1653 年）などを利用し、獣師は鳥害をふせぐブドウ畑の見張りであることを指摘する。礼拝堂壁面には獣師の背後に聖ブリギッドが竜巻から穀物畑の収穫を守る場面が表されており、聖人の生涯に鳥獣師は登場しないために不可解な表現と見られてきた。けれども農作物を保護する点で獣師と聖人は同じ役割を担い、雷を鎮めるバルバラ、竜巻を鎮めるブリギッドの二人の聖人とともに、ブドウを収穫するプット／天使の傍で鳥獣師はブドウ畑を守っている。つまり礼拝堂の装飾はブドウと穀物の収穫になぞらえることでキリストの身体の称讃を表現していると言える。また、獣師のもつ畏がまるで十字架に見える点についてもこれまでに指摘はなく、類似をほのめかした研究も存在するが（Cortesi Bosco 1980）、ここではおもにベルガモ滞在時期の画家の樹木表現に焦点を合わせて再検討したい。キリストの贖いにかんする説明においてセビーリャのイシドルスは鳥獣の比喻を用いたが、こうした鳥獣師の表現がそれに関連している可能性を指摘し、画家の発想の解明を狙いとする。